

「2006 中国・瀋陽世界園芸博覧会(通称「瀋陽花博」)」 に見る中国の自然環境問題への取組

名城大学 理工学部 電気電子工学科 教授 河村 英昭

Professor Hideaki Kawamura
Department of Electrical and Electronic Engineering,
Faculty of Science and Technology, Meijo University



はじめに

エネルギー消費型経済成長の結果、20世紀後半には「自然環境破壊」の問題が世界の関心事となり、「トリレンマ」なるキーワードも誕生している。隣国・中国では、一党独裁を堅持しつつ市場経済の導入という新しい社会スタイルをとり、GDP二桁の経済成長を持続している。そのような中、「自然との共生、自然との調和」をテーマに「瀋陽花博」が、中国国内50強の都市、世界20数カ国が参加して開催されていた。「瀋陽花博」を通して、中国の自然環境問題への取組について、ほんの一部ではあるが肌で感じた事柄をここに紹介する。

「瀋陽花博」に見る中国の「自然環境問題」への取組

「花博」会場は、瀋陽市中心部から北東へ約20kmに位置する、200ヘクタール強の広大な自然を生かした丘陵地にある。「大阪花博」会場の約二倍の広さである。写真1は丘の上にそびえる「瀋陽花博」のシンボルタワー「百合の塔」であり、園内のあらゆる場所から見る事ができる。タワーの周りには、白・橙・黄などの色鮮やかなユリの花が咲き誇っていた。今回は「百合の塔」を含む全会場の四分の一程度を見てまわる。パビリオンとしては「バラの館」だけが目を引き、残りは太陽の光を燦々と浴びた自然そのものが会場である。広大な丘陵地の其処ここには、各地の代表的な建造物・史跡などの



写真1 シンボルタワー「百合の塔」

レプリカが、自然の木々・花々をバックに「小都市空間・史跡群」を演出している。今年の中国は例年になく雨が少なく、花の手入れが大変であったと聞く。異常気象・温暖化が原因しているのだろうか。



写真2 小型風力発電設備



写真3 オブジェと太陽光発電設備

園内の小高い丘の上には、写真2に示すような小型風力発電設備が設置されていたが、訪れた日はあいにくよく晴れて穏やかな日であり、発電に寄与していないようである。また、木々の間には写真3に示すようなオブジェも多数配置され、自然との調和を図ることを意識してか「小型太陽光発電システム」を利用した夜間照明装置が設置され、夜間のライトアップに備えている。各会場間の移動にも環境に配慮した移動体・電気自動車が使われており、会場内は自然環境にやさしい新エネルギーを利用した機器・施設がそこかしこに導入されている。

「瀋陽花博」はまさに、昨年、我国・瀋陽市で開催された「愛知万博」のコンセプトに共通するものであり、自然環境に配慮した新しい取組・技術が、リアルタイムで世界中を駆け巡っていることを実感する。

現在中国の経済・エネルギー事情を瀋陽に拾う

「花博」会場までは、自家用車で送り迎えをしてもらったが、片側三車線をあふれるように走行する車輛、加えて会場内巨大駐車場の乗用車の多さを見るにつけ、しかもそのほとんどがヨーロッパ車であることから、GDP二桁を持続している現在中国の経済成長をまのあたりにした感じである。また、「花博」会場での昼食時、食しているランチの価格は市内レストランの4 - 5倍であるが、とぶように売れている。なかにはジョッキ一片手に生ビールを飲んでいる若者も目につく。「花博」会場という限られた一空間の人たちを見ただけではあるが、中国経済の成長を支えている底力・市民力の一部を垣間見たきがある。

丁度十年前の1996年10月、国際会議で訪れた西安での記憶がよみがえる。当時、薄暗いレストランで食事をしたとき、ふと終戦直後の子供の頃に経験した電力不足の薄明かりのなかでの団欒のときのことがオーバーラップしたことを、である。しかし、慢性的な電力不足が続いていると報じられている現在中国ではあるが、瀋陽市街の町並み・デパートのショーウィンドなどを見る限りにおいて、そのけはいは微塵も感じられない。

環境保護都市・歴史の町、瀋陽

写真4は「花博」の帰り道、立ち寄った市街南側を流れる渾河の川岸で遊ぶ人たちの光景である。3年前までは悪臭を放つどぶ川であったそうである。今は川岸が緑多い公園と化し、遊覧船も通う憩いの場の一つとなり、自然環境に配慮した緑豊かな「生態都市・瀋陽」を目指していると、誇らしげに説明してくれたことが印象的である。「瀋陽花博」を契機に、自然環境に配慮した新しい町・「瀋陽」の顔が見えてくる。



写真4 浄化された渾河に集う市民

また、瀋陽は日本人にとっても旧奉天時代から馴染みのある都市である。赤・黄の花々が咲き誇っている街なかの、赤レンガ建ての瀋陽駅の界隈をぶらり歩いてみる。戦前の歴史が詰まった建造物は、近代化を象徴するノッポビル群の中で今も現役で活躍していた。現在「遼寧賓館」として使われている旧「大和旅館」のロビーに入ってみる。高い天井からは、アンティークで重厚なシャンデリアが吊り下がり、エレベータ乗り場の横壁に貼られた宿泊者名簿からは、毛沢東、周恩来、蒋介石、愛新覚羅・溥儀、等々の歴史上の人物名が読み取れる。昭和初期の中国と日本の歴史が刻まれている、歴史の重さを感じられる都市・瀋陽でもある。

おわりに

「京都議定書」発効後、2年が過ぎようとする中、「2005 愛知万博」「2006 中国・瀋陽花博」と出会い、改めて「地球環境問題」を考える機会となった。特に、今回の「瀋陽花博」では、「緑豊かな自然環境」そのものが「地球環境」であるべきこと、「自然環境問題」は国を越え、民族を越えて世界の人々が「一地球人・人間」として取り組まなければならない「地球上生物」の一大事であること、を「生態都市・瀋陽」を目指す瀋陽市民のメッセージとして発信していたような気がする。

河村 英昭（かわむら ひであき）氏 略歴

昭和40年 3月 名城大学理工学部電気工学科卒業

昭和40年 4月 名城大学理工学部 技術員

昭和41年 6月 名城大学理工学部 助手

昭和48年 1月 名城大学理工学部 講師

昭和59年 4月 名城大学理工学部 助教授

昭和61年12月 工学博士（名古屋大学）

平成 4年 4月 名城大学理工学部 教授（現在に至る）

主に、エネルギーシステム（主に、太陽光発電システム）と環境に関する研究に従事